

岐路に立つ日本人学校

—— バルセロナ日本人学校の新たな特色づくりを求めて ——

前バルセロナ日本人学校 校長

福岡県太宰府市立太宰府中学校 校長 清 武 康 之

キーワード：在外教育施設、バルセロナ、学校の特色づくり、外国語教育、インターナショナル校との競合

1. はじめに

最後のチャンスとばかりに、初めて在外教育施設に応募し、赴任が叶ってからの2年間の派遣期間、校長として実践した学校経営の概要について、この誌面を借りて整理したい。バルセロナ日本人学校での経験は、私の教員人生の中で最も異色なものであり、かつ帰国後の校長としての職務に、実に様々な示唆を与えるものであったと感じている。さらには一般の公立中学校勤務では味わえない様々な感動とともに、基本的に私立学校である日本人学校の経営上の難しさも体験した。ここでは、表題のとおり、在外教育施設の存在理由の変質と駐在員等の保護者の意識の変化について触れながら、これからの在外教育施設の教育に求められているものの一端を、バルセロナ日本人学校での経験を通して述べるものである。

2. バルセロナ日本人学校の学校運営上の課題について

(1) 児童生徒数の漸減の実態

バルセロナ日本人学校は、この10年間の児童生徒数の推移を見ると明らかに減少傾向にある。最盛期は優に100名を超える子どもたちが、ここに学び、学校生活を謳歌した、過去の記録が残されている。1986年のEU加盟に始まり、1992年のバルセロナオリンピックの開催等、スペイン経済は活況を呈し、日本企業の進出も著しかった時代から、2000年代初頭の不動産バブルの破綻、2012年のスペイン経済危機により、スペイン経済は深刻な不況に陥った。

その長引く不況により、昨今は日本企業の撤収等、その経済状況が本校の児童生徒数に変化を与え続けた。平成17年度より児童生徒数は初めて2桁となり、その後の10年間でほぼ50名程度と、最盛期の半数以下までに減少している。入学金・授業料収入と経営母体である現地企業会（バルセロナ水曜会）からの寄付金で運営を賄っている日本人学校としては、学校存続の危機といえる状況を迎えることとなった。

(2) 学校運営委員会一丸となった取り組みの概要

原則毎月第2木曜日に開催される学校運営委員会では通年で、いかに児童生徒数を確保していくかが、協議の中心となっていった。その方策として、次の4点から児童生徒数の維持・増加のための方針を確認した。

- ①併設する幼稚部（幼稚園）の入園条件の緩和と卒園後の日本人学校への進学者への入学金の免除等の特典の付与
- ②学校運営委員会による、現地企業会加盟企業の次期人事並びに該当駐在員の家族構成等の情報の入手と学齢児童生徒をもつ駐在員保護者への日本人学校の紹介アナウンス
- ③バルセロナ補習授業校からの編入学者の促進



現地校への訪問・交流活動で最後の記念撮影（中学部）

④特色ある教育課程の編成と学校の魅力づくりの一層の推進

以上のような方針の中で、学校として真摯に取り組んでいくことの必要性を感じたものが④の方針である。特色ある教育課程の編成、特に確かな学力の育成を基盤に据えて、魅力ある授業づくり、学校行事づくりを全教職員で協議しながら進めていった。このことについては、近年の児童生徒数の減少による派遣教員定数の縮減で、従前の学校行事等の見直しを迫られているという、もう一方の課題があり、学校の教育活動の「魅力づくり」とともに「スリム化」も併せて実施していかなければならないという、相反する状況を抱えていた。

(3) 日系企業関係者からの「辛辣な」アドバイスを受けて

本校経営の母体であるバルセロナ水曜会の定例会が2ヶ月に1回、バルセロナ市内で開催される。この中で、「日本人学校からの報告」として毎回、校長として学校の近況について報告を行い、かつ駐在員ご子息の日本人学校への編入学を継続して依頼してきた。あるとき、バルセロナ水曜会の有力企業である、日系電機メーカー現地法人会社社長A氏と私との間で、定例会後の懇親会の場で、次のようなやりとりがあった。

A氏「日本人学校の魅力やよさとは何ですか」

校長「一つには、在外にありながら日本国内とほぼ同等のカリキュラムで学ぶことができるということです。

日本国内の国公私立中学校・高等学校との接続がスムーズに行えるということは最大の魅力ではないでしょうか」

A氏「校長先生は状況を正しく理解されていないようだ。日本人学校では、国内と同等のカリキュラムで教育が行なわれていることは、保護者にとっては決して魅力とはなっておらず、むしろそのことが却って足かせとなっていることを自覚された方が良い」

校長「それはどういうことでしょうか」

A氏「駐在員として子どもを帯同して赴任している保護者の心情としては、せっかく海外で生活しているのに、子どもに、日本国内と同じ教育内容で学ばせたいと思っているのでしょうか。駐在員である保護者は、最近子どもをインターナショナルスクールや現地校に入れようとやっきになっていますよ」

校長「確かにバルセロナ在住の10分の1の子どものしか、バルセロナ日本人学校に通学していないという実態がありますか…」

このA氏の、辛辣だが的を射ているサジェストは、私に基本認識の転換を迫るものとなった。実際に毎年編入学児童生徒のうち、実際はバルセロナ地区のインターナショナルスクール（英国系ケンジントンスクール、米国系ベンジャミン・フランクリン・インターナショナルスクール等）の編入学で失敗し、やむなく日本人学校へ編入学してきている者が、少なからずいることを学校としても把握はしていた。このA氏の指摘は、端的に言えば、日本の学習指導要領に基づく教育を施すことを目的としている在外教育施設は、もはや保護者にとっては魅力たり得るものではないということである。

3. バルセロナ日本人学校の新たな特色づくりを求めて

(1) 学校行事等の見直しと魅力づくりのために

先に述べたように、日本人学校としての新たな魅力づくりと派遣教員定数削減に伴う各種行事のスリム化という課題を、学校改善の両輪として進めて行かなければならない状況の中で、まず行ったのが毎年盛大に行われていた学芸会のスリム化と学習発表会への移行であった。当初、保護者会からは、伝統的なバルセロナ日本人学校の学芸会を廃止することに対し、厳しいご意見が寄せられた。しかしながら在籍9名の派遣教員（25年度）と5名の現地採用教員ではあまりに負担過重となっており、実際24年度（前任校長時）には病休者が出る状況も見られたという。そこで、学芸会をスリム化しただけの学習発表会とならぬよう、学習発表会のあり方については、職員会議で様々に議論を重ね、今日的な教育課題である、児童生徒一人ひとりの学ぶ意欲の向上と豊かな表現力

を、最大限に発揮させるという意図で、創意工夫した学習発表会を企画・計画、実施できるように努めた。小学部では低学年がロールプレイを中心とした発表、高学年はITCを活用したポスターセッションやテーマ探究活動など、さらに中学部においては、学術的に高度な研究発表を、プレゼンを駆使して行うなど、各学年の発達段階に応じた、豊かな自己表現の具体像をイメージしながら活動に取り組みさせていった。私の赴任年度である25年度に第1回目を実施し、保護者から一定の評価をいただくことができた。26年度第2回目の学習発表会においては、参観者の門戸を保護者以外にも広げることで、バルセロナ日本人学校が今目指そうとしている、新しい教育活動への取組の一端を幅広く広報することができたといえる。

次に集団宿泊的行事として本校では小学部5、6年、中学部1～3年それぞれ別途に実施していたものを、27年度より合同実施するようにし、予算等のスリム化を図るとともに、小中学部を跨いだ縦割り集団活動の充実を図るように努めた。25年度、26年度とも中学部の生徒数は12～13名であり、集団宿泊的行事の目的である集団生活の意義やあり方を学ぶための規模としては不十分であったことがその背景にある。行事のスリム化と目的性を同時に満たすことができる対処であったと考える。私の帰任後の27年度、ピレネーの麓の古都セウ・デ・ウルヘルでの、小中合同の第1回宿泊学習会が実施され、成功裡に終えたという現校長からの連絡をいただいたときは、思わずほっとしたところである。

(2) 魅力づくりとしての「外国語教育」の推進

学校行事以外で保護者からの要望が強かったものに外国語教育の充実が挙げられる。バルセロナ日本人学校では教育課程外の「英西会話」の時間を週時間割の中に、各学年とも2～3コマ設定し、スペイン語会話や英会話の学習を別途設けている。保護者の要望としては、生活言語や現地校交流の際に必要なスペイン語よりも、国際公用語としての英語の力を伸ばして欲しいという意見が強かった。そのような保護者の願いを実現するための教育課程の工夫改善について、校内でプロジェクトを新規に組み、中学部の英語科教諭を中心として、教育課程内の小学部の「外国語活動」並びに中学部の「英語科」の授業と、教育課程外の「英西会話」の時間を有機的に関連づけ、児童生徒一人ひとりに「話せる英語」「使える英語」の力をつけるための指導計画づくりに着手するように指示した。本校では、「米西会話」教育課程外のコマ設定が多く、1日7時間の週34時間の週時程となっており、ゆとりのない中での指導計画案づくりは相当な困難さがあったものと思われる。校長としては、外国語教育充実のための人的基盤を整備するため、本校の非常勤講師であったネイティブのスペイン人教員を正規教諭として契約更改をし、さらに語学堪能なバルセロナ在住の邦人非常勤講師を、それまでの小学部専科担当から、英語・スペイン語の主担当の一人として、外国語指導の担当者を手厚くするなどして、指導の充実を図る体制をつくるようにした。ただし、このことについては26年度にその方向付けを図ったものであり、26年度末で帰任する予定となっていた私には、その実践については27年度以降の次期校長に委ねるといって、いささか無責任な形でのもので終わってしまっている。



戦国大名について発表しよう！（小学部、学習発表会）

4. 新しいバルセロナ日本人学校のグランドデザインの提示

(1) バルセロナ日本人学校のリーフレットの作成

学校の魅力づくりの検討を進めていながら、最終的に右図のようなリーフレットにまとめ、バルセロナ水曜会所属企業やバルセロナ補習授業校の保護者等に配布し、本校の今後のあり方について、また特色ある日本人学校のコンセプトとして広く啓発していった。学習指導要領に準じた教育活動を基盤としながらも、特色づくりの4つの観点（「語学教育の推進」「異文化交流活動の充実」「芸術的感性の醸成」「自己表現力の育成」）を明確にして、従前から行ってきたこれらの教育活動を全面に打ち出すよう努めた。

(2) 各種説明会での広報活動の実施

リーフレットの説明を中心として、バルセロナ水曜会定例会や補習授業校の保護者会での編入学説明会を積極的に行っていった。日本人学校への編入学の潜在的ニーズを十分あるように実感した。児童生徒数の確保のためには駐在員子弟だけではなく、国際結婚によるミックス・カルチャーの子どもや、スペイン永住者の日本人子弟等への幅広い広報を通して、多様な子どもたちの教育の受け皿として機能する学校としていかなければならない。

5. 終わりに

子ども一人ひとりに個性があるように、学校にも個性が求められる。私学である日本人学校あれば、なおさらのことである。この学校に入学すれば「このような勉強ができる」、「このような体験ができる」、「このような力が育つ」という自校のよさや特性を、学校経営のビジョンとして明確にもつことが校長としての責務であり、経営力であろう。2年間の派遣期間では、その職責を果たすことは難しい面もあったが、バルセロナ日本人学校の今後の発展と教育活動の一層の充実を心から願いたい。

